

歌を学ぶ

イーシャ・サーデサイによる再話

それは夜の時間、少年は背の高い草の中を歩いていました。一方向には彼の家族の野営地がありました。反対の方向には遠くに小さな池がありました。その方向に歩いて行くと、暗闇の中で、青緑の蛍光色の断片がちらちらと見えました。

たびたび少年は立ち止まって、目を閉じては、草の間を通り抜けていく風の鳴る音を熱心に聞きました。「ヒューヒューヒュー」と、風が言ったようでした。そして少年は思うのでした。「あれがそうかな？ あれが歌？」

彼は少しの間、目をぎゅっと閉じたまま、風が言葉か聞きなじみのある旋律か、何か理解できることをささやいてほしいと願いました。「ヒューヒューヒュー」。悲しいかな、彼が聞くことのできたのはその音だけでした。

少年と彼の一族たちは、何世紀も後にオーストラリアとなる広大な未開墾地に住んでいました。彼らのいる土地は非常に神聖な起源を持つ地で、創造の精霊が歌ってそれを誕生させたのでした。そして今、賢者たち、知識のある者たちは、その歌を歌ってそれが導く所に従うのでした。

「おお、偉大なる母よ」と、少年は風にささやきました。「あなたの足音を示してください。あなたの歌の音を奏でてください。僕は知りたいのです」

少年は歩き続けました。彼はもう池の近くに来ていました。その輝きは、周りの草やユーカリを通してでも見て取れました。彼の足の下では大地が脈動し、それはあたかも水がその中を勢いよく流れているかのようでした。その脈動はいつそう速くなるようでした。そして、そよ風も勢いを増していました。草はそれに合わせて揺れ、その動きの中で芸術的に渦を巻いていました。

少年は池の端にたどり着きました。彼はひざまずき、鼻先をその鏡のような宝石のような水面に向かって傾け、そして奥底をのぞき込みました。するとその時、聞こえたのです。最初は穏やかに、そしてすぐに大きく強く。一つの音——二つの音——リズム、メロディー。

少年は驚いて目を上げました。そよ風は近くの花々の茎から小さな花びらを持ち上げていました。そして今、それらの花びらは彼の周りで渦巻き、その舞は歌の音を運び、先へと駆り立てていました。この音楽の中に、祖先たちの声が聞こえました。この音楽の中に、大地のささやきと空のうなる音が聞こえました。この音楽の中に、この壮大な現実を創造した者の声が聞こえました。

彼が再び水面にかがみ込むと、その歌はあらゆる方向から彼を抱き締めました。涙が鼻を伝って流れ落ちました。その音はこの上なく美しく、幽玄であると同時に深く親しみを感じるものでした。その音が彼の内側に目覚めさせたその感情に名を付けることができるなら、それはただ、「わが家」だったでしょう。

彼がこの新しく発見した感情に驚嘆している時、別の音が聞こえました。ザク、ザク。それは誰かの足音のようで、足の下草や小枝が立てる音でした。彼の目の端に、銀色のあごひげの湾曲した先が見えました。

振り向くと、彼のコミュニティーの年寄りの一人がそばに立っているのを見つけました。男の顔は琥珀(こはく)色と漆黒が混ざったように浅黒く——そしてそれは柔らかい革のように風雪を

経ていました。彼の顔を縁取っているのは、同じ銀色のふさふさした髪でした。彼の目には優しさがありました。

「聞こえたかい、おまえ？」と、彼は少年に尋ねました。「あの調べが？」

「はい！」と、少年は声を潜めながらも大喜びで言いました。「おじさん、あなたにもそれが聞けるのですか？」と、老人に対して敬語で聞きました。

「いかにも」と、老人は言いました。「そして私はそれを歌うことができる。おいで」

老人は歩いて池の端を回り、そのすぐ向こうの茂みの中に消えました。少年は大きく目を見開いて彼を見詰め、はい上がるようにして後に続けました。

老人は、低くりズミカルな調べを優しく歌っていました。その歌のある箇所に来ると、彼はその音楽が彼に命ずるままに、左へ右へと大きく向きを変えました。彼はしばらくそのようにして歩き、少年は小走りについて行き、やがてついに樹皮でできた小さな住みかに近づきました。その前にはたき火がパチパチと音を立てていました。

「おいで」と、老人は再び言いました。「おなかがすいただろう。私の妻が何か料理しているよ」

二人がたき火の周りに座ると、一人の女性が小屋の中から現れて、火の中の燃えさしをつつきました。彼女も浅黒い肌と銀色の髪をしていました。

「そう——あなたはあの調べを聞いたのね？」と、彼女は少年に尋ねました。彼女は、種子がたくさん入った丸くて分厚いパンを燃えさしの下から引き出して、彼の前に置きました。

「はい、おばさん。聞きました」と、少年は興奮して言いました。起こったことを思い出すと、言葉はほとぼしるようになってきました。「素晴らしかったです！」と、彼は言いました。「僕は偉大なる母に本当に一生懸命にお祈りしていました。僕は言いました。おお、大いなる母よ、僕のためにあなたの歌を奏でてくださいって。すると、光り輝くあの池を見つけたのです。そうしたら——そうしたら——」。次に起こったことを思い出すと、彼の目は潤みました。「最高に美しい音楽——そして草や花やすべてが踊っていたのです…」

「再び聞くのを待ちきれません」と、最後に彼は言いました。

「そうね——そしてあなたはまた聞くでしょう」。老女は静かに含み笑いをして言いました。「取りあえず、あなたは練習を始めるのね」

ちょうどパンを大きくかじった少年は、彼女の言葉を聞いて止まりました。彼の両ほほが膨らみました。

「練習？」と、素早くパンをのみ込んで彼は言いました。

「そうよ、もちろん」と、彼女は言いました。「もう一度その体験をしたいなら、そして今夜おじさんがあなたを導いたように、それを使って他の人を導きたいなら——その歌を学ばなければ」

「そしておまえはそれを練習しなければ」と、老人は言いました。

「でも——なぜですか？」と、少年は尋ねました。「僕はすでにその歌を聞きました。それを忘れるつもりはありません」

「まあ、誰もそれを忘れるつもりなどないさ」と、老人は優しく言いました。

「その通りです」と、少年は言いました。「そして僕もです。ご存じでしょう、偉大なる母と僕——僕たちはつながっているんです」

「確かに、おまえはつながっている。しかし、それはおまえが練習しないということにはならない」

少年は鼻にしわを寄せました。彼はこの考えが気に入りません。花の舞はどうなの？ 草の揺らぎは？ 彼は飛ばしてその部分に進みたかったのです。

「たぶん他の人たちは練習が必要でしょう、おじさん」と、彼は断言しました。「でも僕には必要ありません。見ててください」

老人は少年の目を深くのぞき込みました。彼はしばらく何も言いませんでした。

それからため息をつき、ももをたたいて彼は立ち上がりました。「よろしい、おまえ。練習はなしだ。でも取りあえず、遅くなってきたので今晚はここに泊まりなさい。明日、歌について行けば家に戻ることができる」

これには一応、少年も同意しました。

翌朝の日の出は壮麗で、金色がかかったオレンジ色の光が平原の上に溶けていました。この光が小屋の中に入ると、少年は眠りから覚めました。

彼は腕を大きく伸ばし、起き上がってあくびをしました。

「うーん」。彼は考えました。「家に帰る前に朝食を何か食べたい」

彼は外をぶらつきました。たき火は再びパチパチと音を立てていて、年寄りたちはその前に座っていました。彼らは彼を見てほほ笑み、そして彼に座るように手招きしました。

彼は手をこすりながら、彼らのそばに座りました。外のその場所は静かで、唯一の音は、ただ時折たき火がパチン、ポンと鳴る音だけでした。太陽は高く空を昇っていきました。

彼は見回して朝食らしきものを探しました。多分パンか、あるいはあぶり焼きにした野菜か。しかし、料理は何もなさそうでした。彼は年寄りたちをちらりと見ました。もう食べてしまったのかな？

彼らは無表情でした。

少年は火に向き直り、彼ら三人は黙ってそこに座り続けました。少年の胃袋が彼を悩まし始めました。時々、彼は再び年寄りたちを見て、彼らが何か食べるもの——いくらかの穀物、1粒か2粒のベリー——をくれるのを望みました。しかし彼らがするのは、少年に穏やかにほほ笑み返すことだけだったのです。

これがしばらく続き、彼はもう我慢ができなくなりました。「おばさん、おじさん」と、彼は思わず口走りました。「どうか——朝食に何か食べませんか？」

年寄りたちは彼の方を向きました。朝日の中で、彼らの顔のしわはより一層はっきりと、縦横に織り込まれている様子を見て取ることができました。

「どういう意味だい、おまえ？」と、老人は尋ねました。

「つまり、今朝、朝食を食べますかってことです」

老人は驚いたようでした。「どうしてそれが必要なんだい？」

「ええと、僕たちは——僕たちは朝食を食べなければ」と、少年は言いました。彼は老人の問いに困惑しました。

「しかし昨夜食べたよ」と、老人は言いました。

少年は聞いていることが信じられませんでした。

「昨夜夕食を食べたからと言って、今朝朝食を食べないということにはなりません！」と、彼は言いました。

「ふうむ」。老人は言いました。「そう、昨夜食べたから、おまえはもう再び食べたくないだろうと思ったのだ。なぜなら間違いなくあの1食で十分だったから」

少年は笑いました。「もちろん、僕はまた食べる必要があります！ それ以外に家に帰る旅のための力をどうやってつけるのでしょうか？」

少年が続けて、人は実際一日3回食事をする必要があることを説明しようとした時、彼は老人のまなざしを捉えました。そしてその顔のしわ——それは少年の想像だったのでしょいか、それとも今やさらに顕著となっていたのでしょうか。まるで歌の英知が目に見えるものになったかのように、真理の地図がその男の皮膚に深く刻まれていたのです。

「ああ」と、少年は静かに言いました。

「うん？」と、老人は言いました。

「はい」と、少年は言いました。「もっと早く理解しなかったことをお許してください。僕は今——練習する準備ができています」



© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。